

イマヌスフ 米国出身の元カトリック信者（4 / 4）

:

明:イスラ ム改宗初期の きが、どのようにして彼女にやってきたか。

目:[事新改宗者ムスリムの逸 女性](#)

より: イマヌスフ

日13 Jul 2015

集日 13 Jul 2015

一人の男性が私のもとに み寄り、 きなれない言 を し始めました。 日になり分かったのですが、彼は「マ シャ アッラ 、マ シャ アッラ 」と言いながら私の腕から娘を抱え上げ、「なんて可 い子だろう」と言いつつ他の男性たちに彼女を せて回りました。

あかの他人が私から娘を取り上げたにも わらず、なぜか私は全く恐怖を感じませんでした。彼は手 よく娘をデスクの上に座らせてペンや 、ホッチキスなどで彼女を喜ばせ、子供の いに れた 子でした。他の男性たちも彼女の周りに集まっていると、アブドルハミ ドが れて私に挨拶しました。

私は握手をしようと手を差し出しましたが、彼はそれを ないふりしてやり ぎしました。男女 のイスラ ム的エチケットについては、その当 まだ全く知りませんでした。彼は私がどのようにイスラ ムと出会ったのか ねました。私は彼にナイジェリア人のアフマドのことを言うと、彼はイスラ ムの基本について 明し始めました。

およそ一 が ぎた 、彼は私にクルア ン写本を手渡し、それを む にはシャワ を浴びるよう言いました。私は即座に合意しました。彼はもうすぐ礼 の が来るため、 しなければならぬと言いました。

私は彼に感の意を表しましたが、最に一つだけリクエストがありました。礼の学です。神者と婚していた私は、なぜかその男性が祈る姿をみたいと思いました。私は常々、神に祈りすら捧げない男性は真の男性ではないと思っていました。

アブドルハミドは礼を学してもわかないものの、物音は立てないでくれと私にみました。合意して一段を降りると、豪華な美しい毯、そしてくぼみのある壁以外には何も無い部屋に入り、彼はそのろで私を待たせました。その壁のくぼみは、礼の方角を示すものであることをに知りました。

男性たちが部屋に入ってくるのをていると、突然き渡った大きな音にきました。それは「アッラフアクバル、アッラフアクバル」という礼への呼びかけでした。それには水が血管の中を走り渡るような感を受けました。私の存在そのものが、その壮大な呼びかけによって醒したかのようでした。

それは一言も理解できませんでしたが、まるで私にりかけているような感じがしました。私の目にはが溢れ、身体はぶるぶると震えました。私は落ち着こうと、腕をんで自分自身を抱していました。

男性たちが礼中にお辞をし、づいたのをたとき、自分があの晴れた日に寝室で行った祈りが重なり、がこぼれ落ちました。私は畏怖の念で一杯でした。言では言い表せないほど感しました。そして自分は居るべき所に居るのだと感し嬉しく思いました。

その数で私は多くのムスリムたちと出会い、イスラムについて多くを学び始めました。私は寝室での礼のだけ着用していたものの、イスラム的衣服を自分でみ始めました。

私はわり始めました。酒をち、豚肉も拒否しました。性格も一しました。私は静かでやかになりました。心に平がれたのです。母は私の化についてねました。彼女は私になったと思いでいました。「どうしてあなたは笑わなくなってしまったの?」と彼女は言いました。私はとても幸福であることを彼女に明しました。ただ、それはよりやかな形だったのです。

私は勇をい起こし、ついにイスラムについて打ち明けました。私が彼女のためにんだ衣服もせました。彼女は激怒しました。私がんだ服も全くに入ってはくれませんでした。

母はファッションにを使う女性でした。彼女は私がんだ服のシンプルさやそのゆったりしたサイズを嘲笑しました。彼女はそれが袋にえたと言いました。その神な言にはつきましたが、私のイスラムにする想いをえることはありませんでした。

私がシャハダをする前の最のクリスマスはのようでした。その当でさえ、私はそれが虚の信仰という暗から私を救い出すためのアッラのやり方であることは分かっていた。それでも、それはとても困な日々でした。

母は私が祝日行事に参加しないことを怒っており、いつものように泥状の弟は、を起こして私の所有物のいくつかを破し、私をすとさえしました。

彼はそれ以前に、私の部屋に入ったに私がイスラム的な服装をしているのを目してました。彼は宗教的ではなく、教会に行くこともなかったものの、私がムスリムになろうとしていたことについては激怒していました。

彼らが怒れば怒るほど、私は自分が正しいことをしていることに信を持つようになりました。私はただに、彼らが生きるような人生をみたくはありませんでした。

その数カ月、私は信仰宣言をして改宗をしました。翌春のある金曜日、私はムスリムになりました。イスラムというり物を、感しつつ虚に受け入れたのです。

母は私が家を出ることを要しました。しかし、アッラはその限なき慈悲から私に新たな家を用意されました。私がシャハダをした同じ夜、その人だったエジプト人男性が私に婚を申しんだのです。

初めてモスクをれたあの、私の腕から娘を抱え上げた私のワリ（保者）は、私の意思をしました。私のたった一つの心配は、彼が良き信仰者であるかどうかでした。ワリは、彼がそうであることをしてくれました。

10日も たずして私たちは 婚し、娘と共に夫と新居に暮らし始めました。彼は娘を我が子のように育ててくれ、アルハムドゥリッラ、その 私たちは2人の男 を授かりました。

もうかれこれ26年が ぎましたが、私のムスリムとしての人生は祝福に ちたものでした。 が つのは本当に早いものです。それらの年月は して容易なものではありませんでしたが、祝福に ち溢れたものでした。

アッラ によって される者たちは を受けます。アッラ はクルア ンにおいて「困 と共に安 はあり」と述べていますが、それが真 であることが 明されました。

年に渡って私との を断 していた母は、 在私と共にムスリムの国に住んでおり、自 的にヒジャ ブを着ています。私は彼女が近い将来、イスラ ムを受け入れるのではないかと期待しています。インシャ アッラ （それがアッラ の御意であれば）。

常々困 は付きまとうものの、これ以外の生き方に えることはもう想像すらできません。私を暗 の中からイスラ ムという光の中へと奇 的な旅をさせてくれたアッラ のご慈悲とお きを日々感 じています。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/index.php/jp/articles/2438>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。